

2019 年 12 月 8 日（日）「新天新地の希望」

ヨハネ黙示録 21:1-7

1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

5 すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」6 また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。7 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」

【序論】

今日は去る10/24（木）に主の御許に召された I 兄を覚えて、追悼礼拝を守っております。生前の I 兄と親交のあった方も、そうでない方も、共にキリスト者に約束されている永遠のいのちの祝福に思いを馳せていただければ幸いです。聖書はどのような死生観（あるいは終末観）を教えているのか。故人は何を信じて歩んでおられたのか。その信仰は、遺された者にとってどのような意味をもつのか。ヨハネの黙示録の御言葉に耳を傾けてみましょう。

【本論】

本論 1. 病んだ世界に新天新地をもたらすキリスト

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。（21:1）

ここに登場する「新しい天と新しい地」というのは、この世界が終りを迎えたときに訪れる新しい世界のことです。「世界の終り」と聞くと、何だか怖そうな話だなあとお感じになるかもしれません。それは、世に溢れている「終末論」は、世紀末的なものが多く、それにまつわる書籍や映画は視聴者の恐怖を煽る傾向があるからでしょう。しかし、聖書の終末観は信じる者に希望を与えます。

「以前の天と、以前の地」という表現も出てきますが、これは現在私たちが生きているこの世界です。聖書はこの世が病んでいると教えます。本来、神がお創りになった世界とは程遠い状態にあると。聖書の最初の巻である創世記では、冒頭で世界の創造の様子が描かれています。元々人間がどういう存在として造られたか、その意味が教えられているのです。まず天地万物が造られ、地球の環境が十分に整えられた後で人類が登場する。この人類に与えられた役割があり、それは他の動植物には備わっていない「知恵」を用いて世界を管理することでした。究極的な管理者は創造主なる神ですが、人間は神の代理として世界の管理者に立てられたのです。その知恵は当初まことに聖いものでしたから、人間は神の目的に従って、すべてにおいて正しく世界を治めることができました。

しかし、その良い状態は瞬く間に崩れ去りました。人間は神から離れ、欲望のままに世界を支配するようになったというのです。つまり、神抜きの世界を形成していった。人類は、環境を守ることも、自分たちにとって利益になることを第一に考えられるようになりました。限りある資源が必要以上に搾取されるという現実がある。このことは、人間と被造物の関係が平和ではないことを言い表しているのではないのでしょうか。経済至上主義は人間の豊かさを第一とした社会を形成し、ある人の利益のためにある人が犠牲になるということが起きています。驚くべき格差社会が存在する。

しかし、私たちは、自分自身が地球の様々な問題と無関係だとは、決して言えないはずで、この便利な世の中に生きていると、温暖化や環境汚染の原因を作り出しているのはほかならぬ自分であるということを、つい忘れてしまうのです。病気や災害は巡り巡って自分に返ってきているものなのかもしれません。この地に生まれてくる限り、病気に罹らない人はなく、生きることに苦しめない人もなく、老いと死を経験しない人もありません。生きるということは困難を伴い、理不尽なこと、誤解されること、怒りや悲しみに打ちのめされることは誰も免れ得ないでしょう。戦争や貧困、差別の真っ只中に生まれてくる人。思いがけない事故で身内を失う人もいます。

聖書は、このような世界が本来神が創造された世界とは違うと語っているのです。この世界はもう一度、本来あるべき姿に戻されなくてはならない。それが「新天新地」であり、その世界を再創造するのが救い主イエス・キリストであります。

本論 2. キリスト者の地上の生涯の意味

I 兄との別れと関係のないことを語っているように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。I 兄の人生にも、多くの戦いがあったのではないのでしょうか。破竹の勢いで伸びていった戦後日本の経済を支える労働者の一人として、馬車馬のように働いた日々を振り返っておられたのを覚えています。また、高血圧、低体温症、膝の痛み、隠れ脳梗塞といった様々な肉体的病とも戦っておられました。

そういう I 兄でありましたが、キリストと出会い、心にまことの平安を見出されたのです。I 兄は、1965年、日本基督長老教会、保谷町教会で受洗されました。1937年生まれでいらっしゃいますので、当時28歳だったと思います。それから82歳までの54年間、クリスチャンとしての人生を歩まれました。今一度、I 兄がどのような希望を抱いておられたのかをご一緒に考えてみましょう。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。(21:2)

ここに描かれているのは、新天新地で催される婚宴の様子です。この婚宴において、花婿とはキリスト、花嫁とはキリストを信じるすべての聖徒（教会）です。教会のことが「**新しいエルサレム**」と表現されているのです。地上の生涯においてキリストを信じたすべての人が、永遠の祝福の下に招かれる。その中には I 兄もいらっしゃるでしょう。人は神から離れて生まれてきますが、信仰によって神と結びつくことができる。罪赦された者として、文字通り「聖徒」としてキリストの前に立つのです。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」(21:3-4)

「**神の幕屋**」というのは、神と人が出会う場所として、地上に特別に設けられた所でした（レビ26:11-12、エゼキエル37:27、Ⅱコリント6:16）。しかし、そのような特別な場所はもはや必要ではなく、神と人がいつでも共にいるのです。そして、すべてを知っておられる神は、私たちの人生を共に振り返り、経験した物事の一つ一つの意味を教えてください。親から十分な愛情を受けられなかった人も、人生の半ばで取り返しのつかない失敗をしてしまった人も、大切な人に挨拶もできずお別れしなくてはならなかった人も、誰かにいじめられ、利用され、誤解されたような人も、そのすべての意味が明らかにされ、神様から慰めが与えられるのです。また、私たちが地上でうまくいかなかった人間関係もことごとく修復されるでしょう。

新天新地においては、人は二度と死ぬことのない「栄光のからだ」が与えられ、永遠の若さに漲り、もはや病も苦しみも存在しない。そして、本当の意味における「管理者」としての責任を果たせるようになるのです。

1 節に「もはや海もない」という表現がありますが、これは古代において「海」が悪魔の住処、嵐や危険や恐怖の象徴であったことから、悪が根絶されることを言い表しているのでしょう。新天新地では罪も悪も存在し得ないのです。

本論 3. 地上の生活への介入

I 兄は、永遠の祝福の中で既に安らいでおられることでしょう。そして、同じ信仰をもって地上の生涯を終えられた敦子姉とも出会っておられると思います。私たちにも、やがてその日がきた時に、先に召された聖徒たちとの再会が約束されています。信じるとは、そのような希望をもつことであります。しかし、私たちの希望は未来の事柄だけに留まるものではありません。私たちの人生には、もう既に永遠の世界で経験する祝福が入り込んできているのです。それはどのようなところに現れているのか。今日は特に 2 つのことをお伝えしたいと思います。

第一に、この地上において神を礼拝することができる。新天新地において、聖徒は永遠に神を礼拝することになります。その生活のすべてが神の栄光を誉め讃えるものになるのです。そこで経験することが、今まさにこの礼拝をささげる私たちのうちで始まっている。そして、私たちは日々の生活のあらゆる局面で神が共におられることを見出していくようになる。そこには永遠に続く礼拝が始まっているのです。

第二に、永遠の世界で見ることになる「赦しと和解」が、私たちの地上の生涯の中でも始まっていきます。私たちはこの人生で多くの「赦せない」という経験をいたします。また、「赦されなくてはならない」多くの課題も抱えているでしょう。これらすべての課題が解決する日が来ます。しかし、この地上においてさえ、永遠の世界で実現していく「赦しと和解」が始まっていくのです。

すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信すべきものであり、真実である。」また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。(21:5-7)

「これらのことばは、信すべきものであり、真実である」と言われています。人間の言葉の場合どうしても不真実が混じってしましますが、神のことばには偽りがありません。私たちは全き信頼をもって、今日語られたすべての聖書のことばを信じてよいのです。

「アルファ」「オメガ」とは、ギリシャ語アルファベットの最初と最後の文字です。つまり、神が万物の創始者であり完成者であることを言い表している。この世界を創造された神が、新天新地の完成を必ず成し遂げてくださる。私たちはそのことを信じているのです。

「いのちの水」は、天国で流れている川のことですが、この川は地上に生きる私たちに既に注がれ始めています。聖書の御言葉が私たちの魂に流れ込んでくる。そのことばは私たちに慰めを与え、神との関係を修復し、人と人との関係をも和解に導く。I 兄の人生にも、天国的慰めが訪れていたのです。

【結論】

地上での別れは厳然たる事実であり、遺された者は寂しさを覚えます。しかし、この事実を受け止めつつ、私たちは永遠の希望に目を向けたいと思うのです。I 兄が既に神様の懷で安らいでおられること、私たちもまた同じ場所に行けるという約束を信じて、残された生涯を歩み抜きたいと思えます。ご遺族の皆様の上に神様からの慰めがありますよう、心よりお祈り申し上げます。

【祈り】

慰め主なる神よ。私たちは今、敬愛する I 兄との地上の別れを惜しんでおります。I 兄が歩まれた人生を振り返り、共に歩んだ日々を懐かしむものです。その生涯には神の恵みが伴い、喜びの日にも、病める日にも、あなたが共におられたことを覚え、感謝いたします。あなたは既に I 兄の魂をお引き受けくださいました。私たちもやがて、同じ安らぎを得られると信じます。そして、永遠とのつながりをもって、この地上の生涯を歩み抜きます。どうか、I 兄のご遺族お一人一人の上に、あなたからの慰めがありますように。そして、希望に生きることができるようになりますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
一人一人の人生の意味を知り、終りの日にすべてのことを明らかにし給う、父なる神の
愛、
新天新地の到来の日、万物の秩序を回復させ給う、主イエス・キリストの恵み、
地上に生きる者に永遠とのつながりを与え、天来の安らぎをもたらし給う、聖霊の親し
き交わりが、
我ら一同と共に、とりわけ 10 月 24 日に主の御許に召された I 兄の魂と共に、そのご遺
族と共に、とこしえにあらんことを。